

月刊

機

1993
2
No.24

発行所 株式会社藤原書店
〒162 東京都豊田鶴巻町五-八早稲田五井ビル
電話 〇三・五二・七二・〇三・〇一(代)
FAX 〇三・五二・七二・〇四・五〇

編集兼発行人 藤原良雄
頒価100円

「言語の真実」を呈示した、ブルデュー待望の言語論

大反響!

『話すということ』について 話すということはどういうことか

稲賀繁美



▲P・ブルデュー(1930-)

屋上屋という言葉がある。ピエール・ブルデューの仕事の面白さは、研究対象に対して屋上屋を築くかのような態度を演じながら、いつのまにか自分が上台にして踏み敷いている当の家の屋台骨を崩り崩し、その家の崩壊を見届けて平然と去ってゆく強かさにある。フランスの知の殿堂コレージュ・ド・フランスへの就任講義では、就任講義とはそもそも何事なのかを解剖してみた。本書『話すということ』でも、資

● 二月号 目次 ●

▼「言語の真実」を呈示した、ブルデュー待望の言語論
『話すということ』について
話すということはどういうことか

稲賀繁美 1

▼『00夜の4人の名版曲』(1980年代バリの日常情景)
写真登場前の最後のタイム・マシン
バルザック人間喜劇の総解き

鹿島 茂 4

▼『異端の思想家』(1980年代バリの日常情景)
偉大なる天才の孤独
J・ミシュレ

大野一 道訳 7

▼『エルク・ド・シシー』(1980年代バリの日常情景)
カプリエル・フォーレとわたし
詩と音楽の出会いについて

金原礼子 12

リレー連載 環境学天の100アローチー1
今、環境問題に思う
「四重の不正」の正成平と経済成長

山田國廣 14

女性史を問う 1

女性史の始源にむかう仮説
河野信子 22

読者の声 16 / 書評『新ヨーロッパ大全』他
18 / 書評日誌 27 / 刊行案内・書店様へ 23
/ スタッフから・出版随想 24

本論を読む」なる權威的著作についての「自己批判文」を、他でもない「資本論」の著者マルクスその人に読ませて、冷笑的なコメントを入れさせる。自分の手は汚さずに、正統派マルクス主義者気取りの出身を、鼻祖マルクスその人の言を借りて挫く趣向だ。循環論法を逆手にとったその手腕、用意周到といわんか、鉄面皮といわんか。

さて、それではこの「話すということ」を訳すということは、一体どういうことか。理屈から言えば、それは屋上屋の上にとさらけに屋を重ねる段取りとなる。この目論み、はたして吉とでるか凶とでるか。お立ち会い、と言いたいところだが、あいにくブルデューは抜け目なく先回りして、その回答も本書で既に提出してしまっている。

ネタはハイテガー。かれの著作を翻訳した哲学者たちが律義に正しい解釈を引き出すと努めれば努めるほど、その秘密はかえって失点となる仕組みで、元よりそれと解る正解には還元できず、還元を禁止し

過程はそれ自体ある transubstantiation の過程なのだ。だが、この錬金術に気付いたからといって、それをそうと分かる訳語に訳し分けてしまつては、著者の錬金術そのものを解体する失態とならうし、逆に同一語の多義性によって隠蔽されたものを、そのまま罷り通らせれば、暴かれたはずの「正体」も訳文から取り逃がすへまになりかねない。

『存在と時間』や『法の精神』の「悪事」への近親愛憎を「昇華」する、こうしたウロボロスの「蒸留器」に巻き込まれた翻訳者こそ良い面の皮。ブルデューの象徴戦略の手中に落ちたが最期、訳者はもはやこれに対して中立な立場を守ることではできない宿命なのだ。著者の悪ふざけを戯画だといつてしまつては、そうではない、とお目玉を頂戴するし、といつて著者の建前を正直に訳せば、こんどは訳者が戯画じみてくる。訳者は自分の裏切りに裏切られ、そうした誤訳や誤解を糧として生き延びる、原書

だからこそ「深遠・高邁」でもありえた『存在と時間』は、解釈者たちの織り成す解説書群の分厚い防壁に守られて、その分ますます嵩上げされ、人類の思索の孤高かつ無謬なる金字塔として輝き続ける。

似たような仕組みで祭り上げられて生き延びてきたもう一冊の神話的な書物に、『法の精神』がある。学者たちはその「すばらしさ」の立証にばかりかまけて、いったいなせそれが「すばらしく」見えたのかという素朴な問いを立て損なつた。モンテスキューのネタを突き止めれば、かえつてかれの「獨創性」が論証される、という錬金術的逆説。「人類の遺産」たちは、自らの出自を明かされてもそれで足元を掘り崩されたりはしないように、解釈者集団と実に巧妙な共犯関係を捏造して、今日に至っている。そうした「社会的魔術」の手の内を(ヤボを承知で)暴きたてる本書の分析は(ヤボなだけに)冴えわたる。

だが、ブルデューの食えないところは、

原初の「悪事」に否応無く加担させられる。「ご安体」の原「悪事」は象徴的財のポトラッチよろしく、雪だるま式に膨れあがる。後悔先にたたず。出版当時パリで購つて読み散らし、その毒舌があまりに痛快だったので運のつき。「口伝」はとにかく、ブルデューの「お経」など翻訳すれば火傷するのは承知のうえで、一介の素人ファンのかせして迂闊にも首を突つ込んだのが災いのもと。それでも毒も食らわば皿まで、ブルデューはとにかく「爆笑」ものだ。「仏蘭西文藝」にとかくありがちな、お高く止まつた勿体振りが微塵もない。ちよつとオツムの良い「庶民」が「言つてはならない」本音をあげすけに吐露して、それがフランス語ならではの論理構築力と幸福な(おそらくは幸福すぎた)結合ゆえに、オドロオドロシイ文章となつて一気に紡ぎ出されるその迫力。構築などというケツタイなものからは最初からおさらばしている「粹」な

自分で暴いた秘密を何食わぬ顔で自分の著作に(「昇華して」、つまり「臆面もなく」)利用する二重底にある(この手法をかれはおそらく本書で一度だけ言及しているラカンから学んだようだ。「聴くに耐える話」に(実際に)耳を傾ける、ということがそもそもいかなる無意識的な社会的共犯によつて支えられているか、というブルデューの(聞くに耐えぬ)解析に耳を傾ける我々。(ついでだが、それゆえこの共犯に結託する行為者が(わざと、あるいはそれとは知らず、ないし知らないうちで)「否認する」「利害」を云々する代わりに、最近のかれは「リビドー」という意識(ego)以前の用語へと好んで退却する)。

このからくりを暴いて意識に理解できる状態へともたらす戦略は、日常無意識に使っている言葉が実は水面下に引きずつていた「正体」を暴くことも並行した作業となる。その過程で同一の言葉もその実体を変化させずにはいない。つまり本書を読む

日本語の「場」に、この「無理無体」を承知のうえでしばし闊入させたい。訳者のそんな我がままを許して下さい。

専門峭壺とは正反対、野暮を承知で現実を見る人間なら必ずやハタと膝を打つ「正論」を書き連ねる大凡人ブルデュー。その真骨頂は、案外この「話すということ」に集約されているような気もするので。アカンこれではとても歯が立たん、とお思いでしたら、ものは試し、気楽に「制定の儀礼」を覗き、第三部罪状告白、第一部(手の内漏洩)、第一部(論敵打破の儀式)と、後ろからでも読んでみてくださいませ。

(いながしげみ/三重大学助教授)

ブルデュー・ライブラリー
話のうしろ話

【言語的交換のエコノミー】
 P・ブルデュー／稲賀繁美訳
 A5上製 三五一頁 四四〇〇円